

Title	アイリーン・ B・ トイバー著 毎日新聞社人口問題調査会訳 日本の人口
Sub Title	Irene B. Taeuber; The population of Japan
Author	安川, 正彬
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1966
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.59, No.2 (1966. 2) ,p.195(85)- 200(90)
JaLC DOI	10.14991/001.19660201-0085
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19660201-0085">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19660201-0085</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

究が一面的だとか、精神史観だとかいう類の批判は論外であるが、単なる歴史学的実証的研究の一つとしてか、文化比較のモデルとして理解し受容れるのも正しくないだろう。近代文化の問題性を解明しようとする研究として読まらるべきである。サムエルズの近著のようなレベルでの批判は、ウェーバーの妥当性を、意図に反して証明する以外の意味をもちえないだろう。

- (14) Samuelson, *ibid.*, p. 59.
- (15) Samuelson, *ibid.*, p. 67.
- (16) Samuelson, *ibid.*, p. 149.
- (17) 梶山・大塚訳、下、二四八―一九頁。

(一九六五・二二・二〇)

- 注(4) 丸山真男「戦前における日本のウェーバー研究」(大塚久雄編「マックス・ヴェーバー研究」所収)
- (5) Weber, Max: *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*, I, S. 1. 梶山力・大塚久雄共訳、「プロテスタントイイズムの倫理と資本主義の精神」下、二四五―七頁。
- (6) Bendix, Reinhard, *Max Weber: An Intellectual Portrait*, 1960.
- (7) Samuelson, Kurt, *Ekonomi och Religion*, 1957.
- (8) Samuelson, Religion and Economic Action: *A Critique of Max Weber*. (*Harper Torchbooks*, The Academy Library, TB 1131), N.Y., 1964.
- (9) 小原敬士「プロテスタントイイズムとアメリカ資本主義——ひとつのマックス・ヴェーバー批判——」(一橋大学経済研究所「経済研究」第一六巻第四号)二九〇頁注7)、二九二頁。
- (10) Samuelson, *op. cit.*, pp. 1-26.
- (11) Samuelson, *ibid.*, p. 49.
- (12) Samuelson, *ibid.*, p. 49.
- (13) Samuelson, *ibid.*, p. 49.

書 評

アイリリン・B・トイバー著  
毎日新聞社人口問題調査会訳

『日本の人口』

Irene B. Tauber, *The Population of Japan*,  
Princeton University Press, 1958.

安川 正 彬

—

今次大戦が終結してのちにわが国で刊行された人口研究の出版物のなかで、人口研究者ならびに人口に心をよせる他の専門家たちを結集した成果として、われわれが誇りうる労作が二つある。一つは南亮三郎他編『人口大事典』(平凡社、一九五七年)の刊行であり、他は、アイリリン・B・トイバー著、毎日新聞社人口問題調査会訳『日本の人口』(一九六四年)の出版である。いまここにとりあげるのは、その後者である。

本書『日本の人口』の訳本ができあがったのは、正確には一九六四年十一月十六日であった。ちょうどその日にはシカゴ大学社会学部長ハウザー(Philip M. Hauser)教授が来日された機会をとらえ

書 評

て、教授を囲んで親しい日本の人口研究者たちが毎日新聞社人口問題調査会で歓談していた。訳本が完成して最初の一冊が届けられたのは、まさにその最中であった。

原著は、連合国軍の日本占領下にあった一九四八年から一九五八年の出版までに一〇年を要したトイバー女史の労作であるが、その後六年の歳月を経て、漸く訳出されたというこの書にまつわるエピソードの数々は、いかに原著が綿密な研究によった労作であり、そしてこの訳出が、いかに入念なそれであったかを端的に物語るものであろう。

ハウザー教授は日本語を解さないが、しかし訳出されたこの本を手にしたとき、すかさずもらした率直な感想は、「この訳本をもう一度英訳したら、原著にまさる立派な労作ができあがることでしょう」ということであった。こうした外交辞令は洗練された白色人種が好んで使うウィットにはちがいないが、しかしこの本に関するかぎり、ハウザー教授のこの感想は、ウィットにかこつけた実感であったらうと解したのは、その場に居合わせたなかのわたくしだけではなかったであらう。

わたくしがアメリカに滞在した当時(一九六〇―六一年)に、アメリカの人口研究者にとって、この原書は日本(日本の文化・社会と人口)を知るうえでのバイブルであった。そのことは、きつといまもかわらずにその価値を失ってはいないであらうし、そして将来もまたその価値が失われることはないであらう。なぜなら、この書が学術的に高く評価される背後には、つぎのような事情があったから

である。つまり、わが国が敗戦と同時に連合国軍の占領のもとにあつて、マッカーサー元帥を総司令官とした当時のGHQの威信が後楯になかったならば、いかに学術的な研究といえども、これほど膨大な日本の資料を集めえなかつたであらうし、関係する日本の官庁や国立の研究所の人口研究者たちが協力を惜しまなかつた余暇と余裕を持ちあわせなかつたはずだからである。

トイバー女史が日本の人口研究者たちにむかつて、原著の扉に「日本の学友たちに捧ぐ」と書いた学者の良心は、こうした事情からの純粋な気持の発露であつた、とここに記しても、内外をふくめて、誰の気持をそこなうことにもならないと思う。こうした意味から、トイバー女史の研究がいかなる事情のもとにおこなわれたかを評価するのではなく、トイバー女史がいかなる態度でこの研究に臨まれたかを評価すべきであらう。そのかぎりでは、日本の関係者がひとしく同女史に最大の敬意を表わしてよいはずであるし、事実、われわれ日本の人口研究者にとつて、同女史との親しみには絶大なものがある。それとともに、毎日新聞社人口問題調査会が種々の困難を押して難解のこの書を訳出された貴重な貢献を喜ぶわたくしの気持をまずはじめに記しておきたいと思う。

## 二

さて、われわれが人口の推移について、古代社会から今日までを語るとすれば、時代を二つに区分して考察することからはじめられるであらう。それは近代化の以前とそれ以後とである。

への道が開けていたから、増大した西ヨーロッパの人口は西の海を渡つて新大陸を開拓していったのである。その後、人びとは経済の持続的発展にもなる生活水準の向上によって、これまでの死亡率低下にあわせて出生力を管理するようになったから、出生率が減退し、人口は少産少死型に変わつていったのである。これが西ヨーロッパが十九世紀後半から二〇世紀にかけて経験した人口進化の推移過程である。

つぎは「人口移動」についてであるが、こんにち人口研究のなかで取り扱いがむずかしく、もっとも複雑な様相を呈しているものは人口移動の問題である。人口移動とはそれが社会的変動なるがゆゑに複雑なのである。経済や社会が定常状態にありながら、人口移動が行なわれるとすれば、そこには人口圧力によって押し込まれる「圧出型」の移動が起こっているはずである。そこでは貧困な農村地域から押し出されて人口が都市へ流れ出ていくのであるから、たんに就業機会をもとめての移動である。したがって、彼らは都市に移つても、低い所得に甘んじた生活を余儀なくされている。

それに対して、技術革新が実現し、工業化が促進されるときは、関連産業を刺激するから、労働生産性が向上すると同時に、雇用機会が開かれて、「吸引型」の人口移動が開始される。さらに工業化を通じて社会が近代化されるから、急速に都市化が促進され、農村地域から人口が都市に集中することによって人口移動が激しくなる。それにもなつて、古い時代の生活様式を崩壊させる方向に人びとを自覚めさせるから、教育の普及とともに、結婚年齢がひき上

ここで、近代化がなされる以前の社会とは、いわゆる伝統的社会を指している。つまり、政治的には権力によって抑えられている社会であるから、文化的遺産は数多く残したかもしれないが、そこでは政治が経済を支配しているから、ある種の記録が残されているとはあつても、経済や社会の実証分析に耐えうるだけの体系化された統計資料は整えられていない。そういう時代を説明できる人口の分析は、精々のところラフな人口増加の分析がなされる程度にとどまるであらう。このことは、西ヨーロッパ諸国の過去をふりかえればわかるように、十八世紀末の産業革命が起こる以前には政治算術派によって「人口の倍加年数の測定」に非常な精力が注がれた先人たちの努力の跡を顧みることによつても明らかであらう。

ついで、近代化が実現すると、経済社会の発展にもなつて統計資料が整えられてくるから、そうした資料を駆使した縦横の人口分析が可能になる。そこでの分析の基本は二つにわけられる。一つは「人口転換」(demographic transition)であり、他は「人口移動」(migration)である。ここで「人口転換」とは経済の持続的発展にもなる人口の生物的变化を調べるものであり、「人口移動」とは経済の持続的発展にもなる人口の社会的変化を調べるものである。

まず、「人口転換」とは、つぎのような人口の進化過程を指している。つまり、多産多死型の伝統的社会から、経済が離陸 (economic take-off) を開始すると、まず死亡率が低下しはじめるので、人口は多産少死型に変わるから人口は増大する。かつて西ヨーロッパ諸国が十九世紀のなかごろにこのことを経験したが、当時は新大陸開発

げられて、出生力の減退にも影響をおよぼすようになる。

また、すでにのべたように、工業化という経済の拡大は、医薬・公衆衛生の発達をうながすから、それによつて死亡率が引き下げられるといわれるが、そのことは、人口移動が一般に、貧困・高死亡率・早婚・多産という地域から、より大きい経済機会・高い生活水準・低死亡率・晩婚・少産という地域にむかつて移動が行なわれることから、こうした結果が死亡率の低下を促進していることも記憶しておかなければならないであらう。さらに他には、都会への希望は遅れた地域の青年たちの夢をかきたてるばかりでなく、事実、都会は工業化によつて若い労働力をもとめているから、人口移動は年齢分布をもゆり動かし、体質を変えていく重要な要因となるのである。

## 三

わたくしは、古代社会から今日までを語る人口変動の様相は以上のような視点にたつて整理することこそ基本の課題と考えているが、トイバー女史のばあいははたしてどうであらうか。

トイバー女史はこれまでもっている社会文化的な学識のなかに、日本の特徴を撰取し、そこに社会文化的価値基準をもつて、広大なフレイム・オブ・リアリティを構成し、そのなかに、前近代社会にあつては日本人口がどのように推移し、近代社会に入りこむと人口はどのように様相を変えていくか、ということに主題をもつて、今日(一九五五年)までの日本人口の動向を書きつづつたの

が、トイバー女史の眼に映じたこの「日本の人口」なのである。ここに目次をかかげよう。本書の構成はつぎのように七編十八章から成っている。

- 第一編 前近代の人口
  - 第一章 形成と成長
  - 第二章 変化する人口
- 第二編 人口転換、一八五二—一九一八年
- 第三編 増加と再分布
- 第三編 人口変化、一九二〇—一九五五年
- 第四章 人口変化・その基礎と型
- 第五章 経済活動人口
- 第六章 家族
- 第四編 人口移動
  - 第七章 人口移動と工業化
  - 第八章 都市および大都市地域
- 第五編 拡大
  - 第九章 フロンティアの定住と利用
- 第六編 自然動態
  - 第一章 結婚
  - 第二章 出生力
  - 第三章 出生力の調節
  - 第四章 死亡

- 第五章 自然増加
- 第七編 平和と戦争の人口学
  - 第六章 戦争の人口学
  - 第七章 人口問題・人口推計・人口政策
  - 第八章 過去と将来

右の目次をさらに本書の内容とともに整理すると時代を四つに区分することができる。一、開国以前の伝統的社会。二、近代化への移行期として、開国前夜から第一次大戦終結まで。三、工業化と近代社会、あわせて日本帝国の時代。四、終戦から今日(一九五五年)まで。以上の四つである。

こうした時代区分の仕方や目次に組まれた他の項目の分類をみると、女史が構成したフレイム・オブ・リファレンスのなかには、わたくしの主張する基本の課題が基礎を固めているようにおもわれるし、そのうえにたつて、巧みに日本の資料(人口統計)がつづられていった跡がうかがわれるのである。

四

この書は人口に接触をもった日本の社会文化史でもある。そして以上のように、人口の動向を長い歴史のなかに考察するとき、三つの柱——前近代社会の推移における人口増加の分析、および近代化以後の「人口転換」と「人口移動」——が基礎におかれていてと考えられる広大なフレイム・オブ・リファレンスのなかに、出生・死亡の変化の様相とともに、木目細かく年齢の動きにまでも気を配っ

組まれたフレイム・オブ・リファレンスが、どのようなものであったかを探索することに興味を感じたので、特定の一部を選びだして、それを批評するような態度をとらなかつたのである。

五

この本から、他に特徴的な二、三をとりあげると、まず、いまはわが国の領土ではなくなった朝鮮・台湾・樺太・沖縄と委任統治の権限を失った南洋群島の統計が、当時のGHQに押えられて、いまやわれわれの手もとを離れてしまったのであるが、これらの貴重な資料が本書に載せられていることである。

つぎに戦後は、一九五五年までの資料を取り扱っているから、GHQが日本の民主化と経済の復興を指導するうえに、日本の人口政策をどのように考えていたか、何を指導する必要があったか等々の占領時代の事情が、この書によって明らかにされていることは、今後に貴重な資料として残る部分であろう。

なおこのほかにも、わが国が海外に手を伸ばしはじめてから今次大戦の終結までを「日本帝国」の時代と名づけているのは、いかにも占領時代にGHQの後楯があつてなされたアメリカの人口学者の研究であつたことを想わせるものがある。

本書が内容において、これまで以上にのべてきたように、日本の人口をめぐる興味深い話題の数々が豊富に盛りあわせられているのであるが、それと同時に、巻末に収録された引用文献目録の周到さにいたっては、誠に驚嘆すべきものがある。原著では膨大な文献を

て、それが教育・習慣・宗教・貧困・生活様式・工業化・就業機会等々の諸要因と、ここにのべた人口の諸要因とを相互に絡みあわせて、あるときは人口が結果となり、あるときは人口が原因となつて、産業や地域の諸問題に言及していく巧みな筆の運びでつづられた本書は、どこの一部をとりあげてみても、一つ一つが専門分野からの研究テーマになりうるほどの、含蓄深い、そして示唆に富む内容の数々を豊富に備えていることが知らされるのである。

人口とは人びとの集まりを意味するから、誰もが口にし、誰もがそれについて語るが、ひとたび人口の構造と変動を体系的に整理する仕事に触れると、人びとは口を固く閉じてしまふか、あるいは、まともでないことを多々弁ずるかのいずれかを選ぶようである。こうした意味からもトイバー女史のこの労作には、われわれが学ぶべき点があまにも多い。

わたくしは、本書のなから具体的な内容を取りあげて、批評や批判をするという態度をとらなかつたけれど、それは本書がある特定の分析方法を中心において日本人口を分析し、何らかの結論をひき出すといった狭い範囲のものではなく、日本の近代化を基準において、それ以前を前近代的な伝統的社会とし、それ以後を近代社会として区分し、近代社会の発展過程における人口研究の基本を柱にして、「日本の人口」を整理した広範な種類のものであるから、文章としてつづられたところは、いわば海面にあらわれた氷山の一部分なのであって、海中に沈むその大きさを考えると、これこそが本書から学ぶべき多くの点なのである。それだけにわたくしは、ここに

丹念にまとめ、あるものはローマ字で、あるものは英訳して収録したのであるが、これをさらに、翻訳するにあたって、もう一度日本語に直すためには元の文献の表題に当たらなければならぬ手数を考えてみると、これもまた骨の折れる大変な仕事量であつたらうと想像される。

翻訳のことといえば、はじめに記したように、毎日新聞社人口問題調査会の努力が実つて、われわれが誇りうる貴重な成果がここに出版されたのであるが、しかし、あえて探せば若干の眼につく点がないわけではない。一つは、原著の出版年次は一九五八年であるが、翻訳書のどこをめぐってもそれが見当たらないことである。もう一つは当時プリンストン大学人口研究所長であつたノートスタイン (Frank W. Notestein) 博士の序文や著者の「はしがき」が訳されていないばかりでなく、詳細な目次と、図表や地図の目次が訳されていないことである。この本のように膨大な内容が盛り込まれている学術書であつてみれば、くわしい目次を通覧することによつて、まとめかたの概略をあらかじめ知ることができればかりでなく、各章にとりあげられた内容の範囲を知ることができるのである。機会を得て改められることを希望したい。

ともあれ、人口研究の専門家たちが座右に置いて寄与するところの多い翻訳書である。

C・P・キンドルバーガー著  
山本登監訳  
『外国貿易と国民経済』

矢内原 勝

キンドルバーガー教授は、日本語訳のある「ドル不足」や廉価版のある International Economics, 1953 や Economic Development, 1958, Second Edition, 1965 (好学社によるアジア学生版がある) 等によつて、日本にもよく知られた国際経済学者である。彼の経済学者としての特徴は、国際経済理論に精通しているとともに、各国の経済史と経済事情についても広い知識をもっているところにある。本書は Economic Development の姉妹書といつてもよいと思われる。後者に比べれば小著であるが、彼の学識はここにもまた遺憾なく発揮されている。

本書の主題は次の二つに限定される。

(1) 一国が国際貿易で売買する財の種類と量を決定するものは何か。

(2) 外国貿易の国民経済生活に及ぼす影響は何か。

外国貿易といつても本書の対象は商品貿易だけに限定されるが、

これを静学を越えて成長の問題として取り扱う。異なつた国の経済成長過程のなかで貿易がどのように変化するか、このような成長および経済生活のその他の側面が、外国貿易の影響の下に異なつた諸国でどのように反応するか、このようなことを研究するのが本書の目的である。

このような研究の方法論として、一連のケース・スタディを概観して、そこから原理を抽出するか、それとも一組の原理を確立してそれを実例で飾るか、という矛盾がある。ここでは、前記の二つの問題の決定要因についての理論的フレームワークを提示するため、演繹的観点を経験的資料で例証するという方法がとられている。その分析方法は定性的であつて定量的ではなく、印象論的な言葉で述べられている。まず提示したい論理があつて、それに適切な実例を付加するというになると、キンドルバーガーの博識は大きな有用性を発揮する。彼の挙げる例のすべてを私が知っているわけではないが、たまたまよく知っている例にぶつかると、簡潔な表現のなかの彼の知識がきわめて正確なことに驚くのである。

2

一国の輸出入の決定要因についての第一の設問に答えるにあつては、これに関連あるすべての要因を包含することが問題である。本書の一一の章はこの設問に向けられている。国際貿易理論では財の輸送費は通常無視されてきた。輸送費が無限大で消費者が国際的に交換しなければ、国際貿易はまったく存在しないし、逆に輸送費

がゼロであれば、地域間に比較生産費差があるかぎり、すべての財は国際貿易で交換される。ところが現実にはゼロから無限大までの間の輸送費が存在するから、またそれは財によつて異なるから、あらゆる財を貿易するものではないというのが、著者が輸送費を導入して言いたいところである。

次に、生産要素賦存によつて比較優位を説明するヘクシャーIIオリン定理の妥当性を検討し、個々の生産要素すなわち天然資源(第3章)、労働(第4章)、資本(第5章)をとりあげている。第6章では外国貿易にとつての技術と技術変化の意味が論じられている。第7章は変化に反応して資源を再配分する一国の能力についてである。第8章は戦争、疫病、植物の病害、ストライキのような偶発的な要素が貿易に与える効果について言及する。第9章は私企業が支配的な体制での独占と国家干渉を取り扱う。第10章は社会主義下の国際貿易、第11章は「外国貿易通減の法則」に特に注意を払いながら、外国貿易に対する経済成長の影響を論じている。

第12章以下の三つの章は、第二の設問、外国貿易の一国経済生活に及ぼす影響は何か、ということにあてられている。この設問に答えるためには、国民経済生活に関係する、外国貿易以外のすべての事柄を除去しなければならない、という問題がある。第12章は、第11章の主題の逆であつて、外国貿易の経済成長に及ぼす効果を取り扱う。第13章は外国貿易の国内安定に及ぼす影響、第14章は外国貿易の諸国民の社会的・政治的生活との関係を論じている。最後に国際貿易と特定国の外国貿易について選定文献目録が付されている。